

- 福岡県は、全国第4位の冬春なす生産県であるが、周年出荷による「福岡県産なす」のブランド化向上のために、**夏秋なすの高品質・安定出荷技術の確立が課題**。
- このため普及指導センターでは、代替品種として「筑陽」の導入を提案するとともに、**追肥作業を削減できる省力化技術の導入を検討**。
- その結果、「筑陽」の栽培面積は大幅に増加し、**福岡県産なすのブランド力向上に大きく寄与**。

具体的な成果

1 新技術による省力効果の確認

■「全量基肥施肥」による追肥回数削減

項目	慣行（基肥・追肥）	新技術（全量基肥）
樹勢管理	難	易
追肥回数	5～10回	1～2回 （補正程度）
収量（慣行と比較）	—	同等

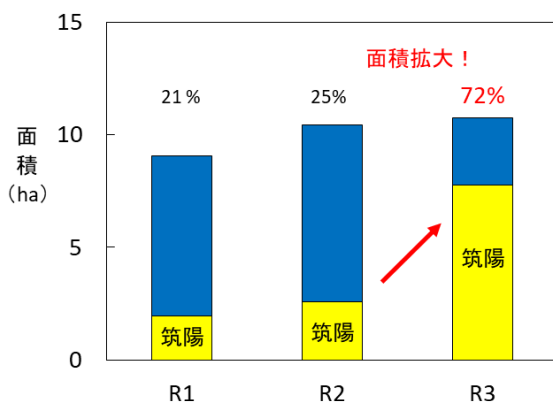
2 栽培マニュアルの作成

■栽培技術の高位平準化と広域普及に向けた**技術者用の栽培マニュアル策定**

増収のポイントとなる管理作業を分かりやすく解説

3 栽培面積の増加

■「筑陽」への品種転換が進み、栽培面積大幅増（事業開始前 R1→開始後 R3）



図「筑陽」への品種転換の推移

普及指導員の活動

令和2年

- 代替品種「筑陽」のブランド力確立に向け、追肥作業を削減できる**省力技術の検討**と広域普及に向けた**マニュアル策定**までの主な実施方針を決定した

令和2～3年

- 各産地で展示ほを設定し、筑陽の品質、収量性等の品種特性を評価するとともに、目標数量を達成し得る**適正な施肥量**を明らかにした。また、展示ほで得られた試験成績や、各産地の優良事例を集約した栽培マニュアルを策定した

令和2～3年

- 消費者ニーズに合致した生産、販売体制づくりを推進するため、J A、市場関係者との意見交換を実施した

普及指導員だからできたこと

- ・専門技術を有し、試験研究機関との連携を図るとともに、他の関連機関と情報共有している普及指導員だからこそ、**新品种・新技術の導入を推進し、福岡県に適した栽培方法の確立が可能であった**

- ・先進的農業者、J A、研究機関、県行政の関係者との交流を進め、多方面からの意見収集を通じて、新品种や新技術の導入の必要性について合意形成が図られ、**関係機関一体となって、新品种・新技術の普及拡大を進めることができた**

福岡県

福岡県産露地なす「筑陽」の普及拡大に向けた取組み

活動期間：令和2～3年度

1. 取組の背景

福岡県は、全国第4位の冬春なす生産県であり、J A全農ふくれんでは、「筑陽、P C筑陽」を福岡県産ブランド品種として位置づけ、生産・販売を行っている。一方で、冬春なす栽培終了後に収穫・出荷が始まる夏秋なすは、様々な品種が混在しているため、実需者からは、同一品種で周年供給が可能となるよう夏秋なすのブランド化が求められている。

夏秋なすは主に露地で栽培され、収量を確保するためには樹勢管理として夏期の追肥作業が必要となる。この追肥作業は夏期の気温が高い時期も含め、定期的に行うため生産者に大きな負担がかかる。また、「筑陽」の県内露地での栽培事例は少ないため、産地からは、「筑陽」の安定生産に向けた省力化技術の早期確立が求められている。



図1 福岡県産ブランドの博多なす「筑陽」

そこで、県内の露地なす「筑陽」における栽培技術の高位平準化による生産安定と作業負担軽減を図るため、福岡県農林業総合試験場で開発された「全量基肥施肥技術」に着目し、現地実証による評価を実施した。また、現地実証の結果を反映した栽培マニュアルの作成を進めるとともに、市場等の実需者より福岡県産なすの消費・販売動向を収集することで、冬春なすとあわせた「福岡県産なすの周年供給体制」の実現に向けた普及活動を展開した。

2. 活動内容（詳細）

「生産体制・技術確立支援事業（令和2～3年度）」を活用し、普及指導員が中心となって、露地なす「筑陽」の生産拡大と品質の安定化を推進した。

具体的には、試験場、J A、種苗メーカー、肥料メーカー等の関係機関と協力し、全量基肥施肥技術の確立に向けて、生育調査や土壌中の養分動態を定期的に調査する現地実証ほを設置した。また、市場関係者との意見交換の場にて、本事業の取組みを紹介するとともに、福岡県産なすの販売、消費の展望や方向性についても意見交換を実施した。

これらの取組みをもとに、福岡県産露地なす「筑陽」の栽培マニュアルを策定し、各産地での技術指導に活用してもらうことで、「筑陽」の栽培技術の高位平準化と果実の高品質化に取り組んだ。

■令和2年度

- ・農業革新支援専門員を中心に、普及指導センター、農林業総合試験場、

福岡県内の J A および J A 全農ふくれん（全国農業協同組合連合会福岡県本部）によるプロジェクトチームを結成した。

- ・県内に 4 か所の現地実証ほを設置し、「筑陽」の果実品質や、着果数の推移等を経時的に調査することで品種の特性を評価した。併せて、土壌 pH、EC 測定や、生産者への追肥作業の削減効果について聞き取りを行い、全量基肥施肥の有効性を評価した。
- ・現地実証の結果、高収量を得るために必要な「筑陽」の樹勢維持管理のポイント等の品種特性を整理し共有できた。また、初期の樹勢維持のために、全量基肥施肥技術の改善点を抽出することができた。

■令和 3 年度

- ・令和 2 年度の実証試験の結果を踏まえ、県内 8 か所の露地なすの現地実証ほを設置し、改良した全量基肥施肥技術の樹勢維持の確認や追肥作業の省力化について評価した。
- ・この他、「筑陽」の栽培技術の平準化を図るために、施肥や樹勢維持管理、病虫害対策等を中心とした指導者向けの栽培マニュアルの策定を検討した。



図 2 「筑陽」の増収に繋がる栽培管理支援 図 3 ブランド強化に向けた出荷目合わせ会

3. 具体的な成果（詳細）

- ・全量基肥施肥技術は、慣行と同等の収量を維持しつつ、追肥回数の削減効果が明らかとなった。
- ・栽培技術の高位平準化と広域普及を図るために、2 か年の取組み結果や各産地での優良事例を集約した指導者向けの栽培マニュアルを策定し、県内 J A へ配布した。
- ・関係機関との連携で「筑陽」への品種転換が進み、作付面積は全体の 72% まで拡大した。



図 4 栽培マニュアル

4. 農家等からの評価・コメント

(宮若市 宮野氏：夏秋なす部会長)

全量基肥施肥は追肥作業の省力化、肥培管理が容易になり、収量、品質の向上に貢献しています。栽培マニュアルは、図や写真による説明がわかりやすく、新規栽培者からベテランまで大変参考になる内容でした。令和元年度から部会員も増えてきており、部会はますます活性化しています。今後も普及指導センターやJA等の関係機関のご助力を頂きながら、安定した生産技術に取り組めます。

(JA全農ふくれん 生産業務担当者)

露地なす「筑陽」の栽培マニュアルは、「筑陽」の特性に応じた栽培管理が詳しく掲載されており、各産地の技術指導のツールとして活用いただけるものと思います。栽培マニュアルを活用することで技術の広域普及と高位平準化も図られることから、今後の福岡県産なすの生産力向上に繋がるものと期待しています。

5. 普及指導員のコメント(飯塚普及指導センター・主任技師・上野廣大)

夏秋なすは6月から11月まで収穫があり、栽培期間が長期にわたるため、追肥作業による樹勢管理が重要になります。露地栽培は特性上、気候の変動に影響を受けやすく、追肥作業の遅れや肥料の溶出が不安定となっていたため、株疲れによる収量、品質の低下が問題となっていました。全量基肥施肥の新技术は、令和2から3年にかけて実証ほを設置し、現地検討会や講習会を通じて生産者に認識され、令和4年産は全部会員での導入となりました。併せて、栽培マニュアルを活用した勉強会を開催し、スムーズに「筑陽」の導入が進み、近年は収量、単価ともに向上しています。

6. 現状・今後の展開等

夏期の所得確保を目的として、露地なす栽培に取り組む事例も見受けられることから、作成した栽培マニュアルの活用場面は今後広がるものと思われる。夏期は大雨や高温による気象の影響を受けやすいため、今後は、安定した樹勢維持管理に必要な整枝技術や樹勢回復を目的とした資材等について検討し、ブランド力の更なる強化を進めていく。